22年ぶりに映画を撮った監督 近藤明男さん(60)

「懐かしい映画、とよくいわれます。うれしいですね」

昨年10月に公開された映画「ふみ子の海」の監督、近藤さんはにこやかに語る。

昭和初期の新潟を舞台に全盲の少女が盲学校で教育を受けられるようになるまでを描いた作品だが、貧しかった時代を懸命に生きる人々の姿を丹念に描いた。「にあんちゃん」（今村昌平監督）や「キューポラのある街」（浦山桐郎監督）など日本映画の名作につながる一つの伝統が銀幕に息づいていた。

監督としては2作目だが、20年近くサラリーマン生活を経ての映画界復帰第1作だ。気がつけば、還暦を迎える年になっていた。

「盲導犬を連れて映画館に来て、じっと鑑賞している人の姿にも感激しました」

こんどう・あきお　1947年8月、東京都生まれ。早稲田大卒。映画監督。昨秋に一般公開された「ふみ子の海」で山路ふみ子福祉賞を受賞。

＜東京都生まれ。高校時代から監督を目指し、早大へ＞

大学では紛争の嵐が吹き荒れていた。「大学の映研（映画研究会）をのぞくと、そこもゲバ棒が飛び交い、1週間でやめた。仲間と8ミリで映画を作っていたら、見習いの助監督の話が舞い込んできたのです」

＜最初は三隅研次監督「雪の喪章」、2本目は増村保造監督「妻二人」。いずれも若尾文子主演。テレビ「ザ・ガードマン」の助監督として約20本製作＞

卒業時、映画製作と興行が一体化し、大手5社が量産する体制が崩壊する直前だったが、運よく大映の助監督試験があった。約600人が応募し、合格したものの、1年半で大映は倒産した。

「新入社員を25人も採るくらいですから、10年は無理でも、5年は撮影所で修業できると思っていた」

＜フリーになり、増村監督の「大地の子守唄」「曽根崎心中」や市川崑監督の「ビルマの竪琴」などの助監督を務めた＞

監督デビューは85年、「想い出を売る店」（サンリオ）。フランスロケした作品だが、興行的にはいい成績を残せず、2作目ができなかった。

「5年間ぐらいがんばったが、企画が通らない。高校以来、映画しかまったく頭にない生活をしてきたから、これはきっともっと世の中のことを勉強しろということなのか、と思いましたよ」

＜2人の子が幼稚園、小学校に入る時期を迎えるのを機に映画の世界から退いた＞

「医療事務関係の会社でネクタイをしめ、営業もやりましたよ。違う世界を楽しむ、というつもりでした」

転機が訪れたのは7年前。友人の本間信行さん（プロデューサー）と再会し、若い日の映画づくりの夢で盛り上がった。同じ増村門下の女優、高橋恵子さんに出演依頼すると、快諾してくれた。

「3人とも大映最後の同期入社で、縁のようなものを感じました。その結果、高橋さんは今年度の毎日映画コンクールの女優助演賞を受賞し、自分のことのようにうれしい」

「ふみ子の海」は、実話をもとにした児童文学者、市川信夫さんの作品。製作資金集めに奔走し、撮影開始という矢先の04年10月、新潟県中越地震が発生した。

映画のロケどころではなくなり、撮影を開始したのは06年3月。地元の人たちも協力し、厳しい環境の下で生きる人々の熱い思いが込められた映画ができた。

「世の中はごく普通の人で成り立っています。見過ごされがちなそんな人々の優しさや厳しさに支えられて、生きていく人間を描きたかった」

カメラワーク、構図、カット割りなど日本独自の映画作法が生かされ、その演出の評価は高い。

「次回作？　まだ決めていません。とにかく今は、この映画を見てもらいたい思いでいっぱいです」

（次回は2月23日に掲載予定です）

普通の人々に支えられる生き方を描きたかった

上「とにかく今は、この映画を見てもらいたい」と話す近藤さん＝大阪市北区で、懸尾公治撮影
下ロケでの撮影風景（右端が近藤さん）＝近藤さん提供

池田知隆の「団塊」探見

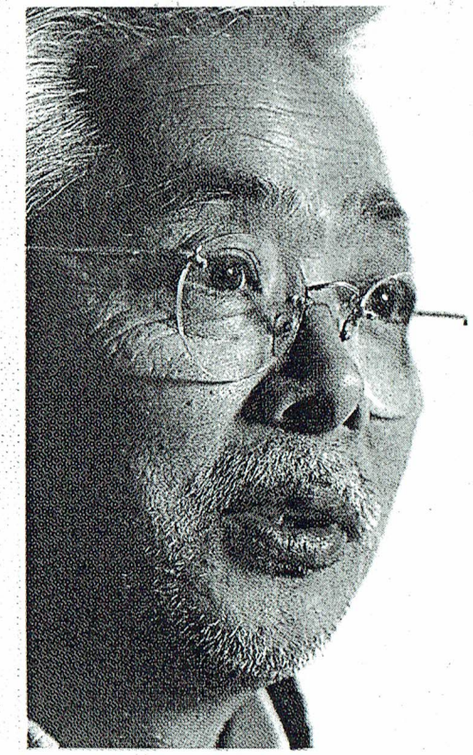
08・1/26

ちょっと一言

ふみ子の前向きな生き方と希望を象徴的に表す海のシーンが美しい。本人の努力はもちろん、周りの大人たちの支えがいかに大切かを感動的に教えてくれる。

日本の女性たちの優しさ、強さ、清潔感も近藤さんは丁寧な演出で見事に描き出していた。そこにはかつて栄華を極め、一時代を築いた日本映画の名監督たちが備えていたある種の確かさ、安定感がしっかりと受け継がれているようだった。　（論説委員兼編集委員）

世界の10代と向き合い続ける 橋口譲二さん(58)



「国や文化をまたぎ、写真という方法を通して多くの人たちとの対話を重ねていきたい」

日本や世界各地を放浪し、若者たちと向き合ってきた橋口さんはいま、カメラを使ったワークショップを続けている。少年少女を対象に、カメラを使って自分の中の感情を知り、表現する面白さや喜びを共有する試みだ。03年にそれを支援する団体「APOCC」を発足、ドイツ、インド、ベトナムなどで「対話の教室」を開いてきた。

ワークショップの間、多くの労力を注いでも、写真家としての作品は残らないし、無収入。それでも子供たちの心に生きる喜びや記憶が残るのがうれしいという。

「インターネットによって人々はつながるどころか、分断されているのではないか。ワークショップによってそんな個人の対話をすすめ、つなげていきたい」

はしぐち・じょうじ　1949年3月、鹿児島県生まれ。写真家。「視線」（太陽賞受賞）でデビュー。世界各地でアートワークを開くNGO（非政府組織）「APOCC」（http://www.apocc.org/）を主宰。

＜地元の私大に進学後すぐに中退。19歳のとき、上京した＞

「当時の学生運動などが気になって東京にでてきた。10・21国際反戦デーの新宿騒乱事件の現場に居合わせたが、どこにもついていけず、さまよい続けました」

現代社会の行き詰まりを予見した若者たちによる「部族」の運動に共鳴し、鹿児島県の南、諏訪瀬島のコミューン（共同体）に参加した。そこに取材にきたカメラマンに刺激され、写真家という「社会を見つめる」仕事への夢を膨らませた。

再び上京し、道路工事、デパート店員、ちり紙交換をした。「一番、勉強になったのはちり紙交換です。社会を底辺から観察できたから」

新聞社や出版社にも突然「写真の仕事をしたい」と飛び込んだ。「そしたら、やってみろ、といわれました。何の実績もないのに。おもしろい時代でしたね」

豊かさが 人の想像力や判断力を侵している

㊤インタビューに答える橋口さん＝東京都杉並区で、長谷川直亮撮影
㊦ベトナムの子供たちと語り合うワークショップ＝「APOCC」提供

池田知隆の「団塊」探見 08

2/23

＜81年、路上に集まる若者と向き合った作品「視線」でデビュー＞

「学生運動も部族もカメラの世界の出会いもいつも遅れた少年でした。だが、遅れたことでのめり込みながらも、自分の立ち位置を見失わず、自分の歩調をつくれた気がします」

「不良」といわれた怒れる若者たちが都市の表面から消え、東京では見えるものは限られる。88年から意識的に日本の現・風景（現在の風景）と日本のさまざまな場所で生きる人々の姿を記録する作業を始めた。

「人の生き方に定型はない。人と人との関係がますます希薄化し、これからは『個人』が大切になると実感しました」

＜「17歳」「Father」「Couple」などを発表。今も日本人を訪ねる旅は続き、雑誌「世界」の表紙を飾っている＞

日本人シリーズの切り口は独特だ。さまざまな場所に立つ人のポートレートには、時が止まったような静けさと絶妙の距離感がある。

「それはウソのつけない距離です。あえて感情を抑え、時代の一断面として撮り、記録屋で、聞き屋で、（時代の）つなぎ屋を心がけた」

＜00年、写真集「17歳」に登場した若者の10年後を訪ねた「17歳の軌跡」も出版＞

「豊かさが今の人たちから感情を奪い、想像力や判断力という人間の最も根源的な部分を侵している。若い人たちには、日本という狭い村社会を出てほしい」

海外の小さな村で、少年たちにカメラを渡して写真を撮る楽しさを語り合うワークショップ。アートを特別な人たちに向けた活動ではなく、市民や社会への発信の可能性を探る場でもある。

「芸術とは縁のない暮らしをしている人たちにも表現する楽しさを知ってほしい。まだ長生きして、頑固なじいさんとしてかかわっていきたい」

（次回は3月29日に掲載予定です）

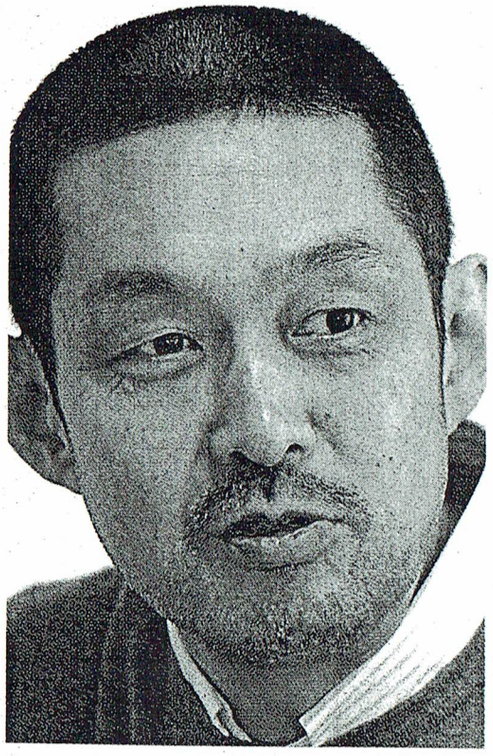
ちょっと一言

「あなたはどんな大人になりたいですか？」。橋口さんは撮影やワークショップの中で必ず少年少女に問いかける。それは同時に自分への問いにほかならない。

団塊世代には「いい思いをたくさんしてきたし、若い人にきちんと伝える責任がある」という橋口さん。「僕のカメラの前に立ってくれた人たちのためにも、体制にこびることなく、孤立を恐れず、群れないことを心がけています」。時代を見つめる表現者としての気概が伝わってきた。（論説委員兼編集委員）

〔第3種郵便物認可〕

「日本の美」を探究する花人 川瀬敏郎さん(59)



「花をいけるとは、生きること。自分らしい花をいけるには、自ら裸になって自然と真正面からぶつかることです」

「花人」と称し、流派に寄らず、自然の花に託して「日本の美」を探究してきた。現在の華道界に対して「『型どおりの花』をいけたり、技巧を駆使したいわゆる自己満足の学芸会です。なんらその人を語ることがなく、儀礼だけしか感じられない」と手厳しい。

花をめぐる旅を重ね、還暦を迎える年になったいま、自然の中に咲いている野の花により魅せられるそうだ。

「野を歩くと、心の声に満ち満ちた花の世界がある。そんな野の花がまるで自分のように感じられ、私のいけた花を目にした人が『花に会った』と思ってさえくれれば、それでいいんです」

＜池坊出入りの花屋に生まれた。5人兄弟の末っ子。4歳で鋏(はさみ)をもち、10歳から池坊の手習いを始めた＞

「自宅の周りには古い家が多かった。番頭さんについて回り、花をいけているうちに好きになりました」

フランスの映画や文学にひかれ、日大芸術学部演劇科へ。折からの激しい大学闘争で、バリケードの中に身をおいた。自分はいったい何者かと問い、卒業後はパリへ。

「パリは住みやすかったけど、そのまま住み続ける必然性はなかった。逆に、川端康成がいう『美しい日本の私』のような、自然を分母として私がいるような感覚を知り、日本という花の記憶をもった土地から離れられないと思えたのです」

＜2年半後に帰国＞

華道界とは一線を画し、独自の道を歩んだ。

「西欧のフラワーアレンジメントのように園芸品種で作り上げるものでなく、自然にある花をすくいあげることに日本の美がある」と、四季折々の花の心にふれる「花会」を各地で催した。

「何も無くても、花が一輪あるだけで、静寂で神聖な空間に変えられる。建築や庭園、花器や掛け物、集まる人々やその衣装、はては天候にいたるまで、そのすべてが総合した花の美を体現したかったのです」

＜79年の花会にきた随筆家、白洲正子さんが絶賛したことで、一躍その名が知られた＞

「白洲さんにはずいぶんと守ってもらった。私の試みを批判するには、白洲さんの審美眼を乗り越えなくてはなりませんから。でも、日本の美についていくら語ろうと、『形になることのできない心を、私は信用しない』という白洲さんの戒めが忘れられません」

人の心を打つ花とは何なのか。大地にちりばめられた草花の一瞬の生をすくいとろうと、吉野、伊勢など日本各地を歩き回った。

「気に入った器に、気に入った花をさりげなく入れる。なげいれの魅力は邪念のなさが根源です。例えば、いい男やなと出会い、傷つき、その体験から出てきたものが花になる。自分の人生を一度も懸けたことのない人の花は誰の心も揺さぶりません」

＜花に心を寄せる多くの人が全国各地からさまざまな花を持ち寄る。そこで「あなただけの花を」と川瀬さんは語り、その魂を見つめる＞

「そこには存在自体が美しい人や、何をしても不器用なのに魅力的な人がいっぱいいる。一方、そつがなくてきれいだが、心にちっとも響かない人もいる。花も人と同じで、人の心の扉を開かせる花か、そうではない花かということです」

花と人との一期一会の対話から表れる花の世界。鮮やかで、凜(りん)としているが、ごく自然で、決して出しゃばってはいない。そんな「無私」の花の美しさを川瀬さんは求め続けてきた。

団塊の世代の多くは、テレビや漫画など新しい文化を享受したものの、日本の歴史や伝統から切れ、あまり目を向けなかったといわれる。川瀬さんはいう。

「心の中に歴史や伝統という縦軸をもたないと、自分を表現できないのではないか。そのことが一番欠けているんじゃないかな」

（この連載は今回で終わります）

1948年11月、京都市生まれ。花人。花をいけることを通して日本の美と心を探究し、独自の創作活動を続ける。著書に「今様花伝書」「四季の花手帖Ⅰ、Ⅱ」など。

かわせ・としろう

心に縦軸を持たないと自分を表現できない

池田知隆の「団塊」探見

08 3/29

上「自然にある花をすくいあげることに日本の美がある」と語る川瀬さん＝京都市上京区で、望月亮一撮影
下京都・大徳寺で花をいける川瀬さん＝野中昭夫さん撮影

ちょっと一言

花の世界に自らの姿を映し出し、生き抜いてきた川瀬さんはいう。「立派な人になろうとは思わない。最後まで一兵卒として花の世界で生きていきたい」。花人といえば、華やかなイメージが浮かぶが、静かな熱情の持ち主だった。

「日本の美」をめぐる味わい深い言葉の数々を紹介できないのは残念だ。「変化球ばかりで、直球を投げられない人は信用できない」とも語り、どこまで本気で世界にかかわってきたのか、と問いかけられた。

（論説委員兼編集委員）